

学長室だより

2019.11.12 NO.20

「英語落語」重なる思い出 ー盛況だったA I U祭

秋は大学祭のシーズンだ。毎年近づくくと、普段のキャンパスは静かなのに、学生たちの動きがにわかに活発になる。10月13、14日にあった今年のA I U祭は1日目は雨天だったが、2日間通して盛況だった。会場では多くの学生がお国自慢の料理などで訪問客をもてなした。

今年も地元秋田市河辺雄和の商工会の女性部や青年部の皆さんが得意の腕を振るって、きりたんぼ、うどん、焼きそばやたい焼きなどの出店を出してくださった。ほかにも秋田名物のババヘラアイス、花輪ホルモン煮込みなどに行列ができた。負けず劣らず、学生たちが披露した自慢料理も、国際色豊かにチャイティー、トッポギ、チュロスなど枚挙にいとまがない。

2014年のA I U祭のこと。ある学生が「英語落語」を披露したことがある。日本の古典落語を英訳すること自体、簡単ではないが、その上、立ち居振る舞いやしぐさになんとも愛嬌（あいきょう）があり、好評だった。英語での落語を来訪者に披露できるのも、本学ならではのことだ。

国内では落語ブームが続き、いまは日本語を母国語としない落語家も登場するなど、落語の「国際化」の動きもある。カナダ出身の桂三輝のように海外を拠点に英語落語を世界に広めている噺（はなし）家もいれば、上方落語の桂あさ吉は国内外で英語落語を手がけ、活躍している。日本人にとって英語でする授業と落語とではどちらが難しいか、わからないが、いずれも人前でのパフォーマンスなので、話術だけでなく、失敗を気に留めない度胸も大切だ。

約40年以上前のことだが、実は私も、米国のインディアナ大に留学時代に「英語落語」を披露したことがある。大学祭の実行委員会の知人から「何かやってくれ」という依頼を受け、急ぎよ思いついたのが、英語で落語をやるということだった。

もちろん、長いものはやれない。落語の面白い部分にしぼって、英語で語ってみよう——。早速、図書館に行き、日本関係の書棚をまわって「日本古典落語全集」という分厚いシリーズ本を見つけ、読んでみた。

アメリカの大学図書館で日本の落語を読むというのも妙な気分になるものだが、日頃は、日本語に飢えているので、スラスラと読めた。かくして落語を3題と、ついでに川柳をいくつか選んで英訳して発表した。

私の出番の発表内容はうろ覚えだが、英訳や話術のまずさもあったのだろう。あまり拍手はわかかなかった。あとになって、米国人の友人から「話の筋で、あそこはなぜ、面白いのか」といった質問を受けた。私の言い訳は日本人が面白いと思う話の脈絡と、米国人が面白いと思う話の筋とは違う、というものだった。ステージに立った私の姿がアニメの「ムーミン」に似ているのでは——。「ノリ・ムーミン」というあだ名は、この頃に付けられたものである。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20191112051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA